# オブジェクション１６６

## 公序良俗編

岡森 利幸

本編は、次の１３項目からなる。（文中敬称略）
文中の会話文にはフィクションが含まれる。

①ヤジ「だったら結婚しなくていい」
②質問の締めくくり「タイは頭から腐る」
③カルロス・ゴーン逃亡
④ソレイマニ司令官を暗殺したトランプ大統領
⑤プーチンのロシア
⑥原発マネーを取り仕切った助役
⑦弁護士懲戒請求と賠償訴訟
⑧ノートに書き留めた「同級生の悪口」
⑨パワーハラスメントと指導力
⑩織田信成＝泣き言をいったスケート部監督
⑪使用しなくても水道メーターが上がる
⑫逗子・斜面崩落
⑬ゴジラがせきすりゃコロナがうつるかも

以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用・要約を示す。

### ①ヤジ「だったら結婚しなくていい」

【毎日新聞朝刊 2020/1/13 社会
玉木雄一郎国民民主党代表が「選択的夫婦別姓」をめぐる質問をした際、「だったら結婚しなくていい」とやじが飛んだ。「同姓も結婚の障害になっている」と指摘したときだった。玉木氏「こういう党に任せていたら、少子化が止まらなかったと思った」】
【毎日新聞朝刊 2020/1/29 総合
玉木雄一郎代表が、２２日の衆院本会議で選択的夫婦別姓で代表質問した際、「だったら結婚しなくていい」のやじは杉田水脈氏と判明。】
【毎日新聞夕刊 2020/2/18 あした元気になあれ［改姓したくない人たち］
国会では「だったら結婚しなくていい！」というヤジが飛んだ。言った議員本人が名乗り出ないのだから、ひどい話だ。】

【朝日新聞朝刊 2020/3/8 社会
夫婦別姓「ちょっと変ですか？」
別姓に賛成６９%でも深まらぬ議論。】

玉木雄一郎国民民主党代表が１月２２日の衆院本会議で政府に対して、選択的夫婦別姓の見解をただした時、議員席から女性の声で、「だったら結婚しなくていい！」というヤジが飛んだ。

そのヤジで、玉木雄一郎氏をはじめ、野党の人たちは、いきりたった。私としては〈外野からのヤジの一つで、むきになるのも、どうか〉というところだ。質問者は、ヤジなど無視して発言を続ければいい。ヤジは、発言権のないその他大勢が外野から発するものであり、公式記録にはぜんぜん残されないものだろう。

夫婦別姓を推し進めたい野党側としては、話の腰を折るような「挑発的な発言」に対し、一瞬動揺し、そして怒りに変わった。「我々の主張を愚弄するヤジだ」と思ったことだろう。そんなヤジは、本人に撤回させ、謝罪でもさせなければ、気がすまない。

名乗り出ないことを「ひどい」といっている人もいる。でも、名乗り出るほどのことでもない。名乗り出なくても、多数の人々が出席している中でも出来事だから、誰かはわかっている。杉田水脈(みお)氏だ。彼女は以前「ＬＴＢＧ（同性愛者、性同一性障害者など）は生産性がない」と言ったことで（月刊誌・新潮４５に書いた）、批判を浴びた人だ。

そのヤジは「場違い」ではあっても、その内容は間違いではないだろう。むしろ理にかなっている。確かに、結婚しなければ、姓を変える必要がない。ぜんぜんひどい話ではなく、彼女なりの一つの見解だろう。

伴侶となる者は姓を同じにすることで、家族の一員として迎え入れられる、という家のしきたりがあるのも事実であり、それが日本の家族の良き風習と思っている人も根強い。姓は「家族名」であって、人物の名前とは別だという認識もある。

しかしながら近頃、夫婦別姓論がくすぶり続けている。そろそろ、それを認めてもいいだろう、という空気が広がっている。夫婦の姓を一つにしなくてもいいだろう、これまでの姓を名乗っていいだろう、その選択は個人に任せよう、個人の自由にしようという考えが広まりつつある。選択的夫婦別姓だ。

結婚で姓を変えることに、拒否反応が強まっている。特に女性の間で、それが根強い。結婚後も同じ職場・職種で働き続ける女性としては、姓を変えることは支

障になることが多いというのだ。
結婚して戸籍上、姓を変えた後、通称として旧姓を使い続けている人も多くなっているし、その通称を容認する企業・団体も増えている。社会的には、人の名前として、「姓」が用いられている事実があり。それが変わるのは、奇異なことという印象を持たれる。確かに、ビジネスや学術研究の場では、名を変えることで同一人物とみなされなくなっては、不都合だろう。経歴や業績、論文など、名を変えることで、切り離されてしまうかもしれない。でも、コンピューター技術的には、名前を変換したり同一人物とみなしたりするのは簡単なことだし、一律に行えるはずだ。姓が変わるのは、他の国でもよくあることであり、世界での対応はできているだろうから、そんなに不便なこと・不都合なことになるとは思えない。
私の見聞では、会社の同僚で男が姓を変えた例を何人か見てきたが、奇異な感じは一時的であり、そのうち旧姓を忘れるほどになっていた。そのために彼らに不利益があったようにはみえなかった。
姓を変えたくない人の中には、〈結婚は個人的なものので、公にするものではない〉という思いが根底にある。結婚したことを公にしたくない人だ。名を変えることによって、「あいつ、いつのまにか結婚している」と、他人にばれてしまうことを嫌っているのだろう、と私は推察している。結婚という「個人的なこと」を公にしたくない人が中にはいるのだ。（それを隠さなくても……）
野党側は、〈姓を変えたくないから、結婚に踏み切れないという人たち〉が少なからずいるし、増えてきていると主張する。彼ら（彼女ら）自身が悩んでいるだし、彼らが結婚しないと社会的に困る。「悩んでいる人がいるのに、政治や社会が放っておいていいのか?」と、憤っているわけだ。
確かに、〈人々が結婚とて、もっと人口を増やしてもらいたい〉と考える政治家や政府にとって、それでは不都合なことだろう。ただし、そんな悩んでいる人を結婚させるために「別姓」を容認するというのは、「苦肉の策」という感じがある。日本の少子化に対して、それを容認することでどれだけ防ぐ効果があるのか、疑わしいところがある。選択的夫婦別姓にすれば、少子化が止められるという見込みには疑問符が付く。
お隣の韓国が伝統的に「別姓」だが、近年、少子化に歯止めがかかっていないという（出生率が２０２１年に０．８６まで低下すると予測されている）。しか

しながら、人口問題の要因は国の事情によっても異なるだろうし、もっと別なところにあるだろう。

ともあれ、一つの世帯（夫婦）に一つの姓という建前は、それなりに意味があり、儀礼としての意味合いもあるだろう。家族の文化として、捨てきれないところがある。結婚とは本来、公的なものだから。家と家とのつながりという面がある。家を継ぐ意味もなくなってはいないだろう。同じ姓なら、その一族の墓にも入れるものだろう。

別姓にしたら、「家族意識」が薄れるかもしれない。自分で選択するのだから、それは自己責任になる。選択制が離婚率と相関を持つのか、統計結果が興味深い。統計をとるためには、あるいは仮説を証明するためには、一度選択制にする必要があるけれど。

考えてみれば、結婚に際して姓を合わせて一つにするのも、しゃれている。新しい人生に踏み出すために改姓するのもいい。意識が変わるはずだ。そもそも、結婚するためには、いくつか乗り越えなければいけないハードルがある。「婚姻届け」を役所に出すこと（籍を入れるという行為）もその一つだろうし、改姓も確かにそのハードルの一つになっている。しかし、跳び超えられないものでもない。それを跳び越えたことによって、新しい人生に踏み出すことの心構えが形作られたりする。改姓は、現実的な「決意表明」になるだろう。「オレは結婚したんだ!」「私は結婚しました!」そう口に出して言わなくても、「改名」がそれを雄弁に語ってくれる。

改姓がめんどうだ、名前を変えない方が便利だ、などとゴネていては、親元辺りから「だったら、結婚しなくていい！」と、ほんとうに言われてしまう可能性がある。誰かが人生の先輩面（づら）して「そんな甘っちょろい意識では、長い結婚生活は持たんよ」と突っぱねたりして。

女の方が一方的に男の姓に合わせるのが、不公平と思うのなら、夫婦となるべき二人でジャンケンして決めてはどうか。

## ②質問の締めくくり「タイは頭から腐る」

【毎日新聞夕刊 2020/2/13 一面
辻本清美氏が「タイは頭から腐る」などと、首相への批判で質問を締めくくった際、首相が「意味のない質問だよ」との野次を浴びせたところ、辻本氏が猛反発。】

【毎日新聞夕刊 2020/2/17 一面
首相は、辻本議員への野次で陳謝した。】

「意味のない質問だよ」と安倍晋三首相が発言したのは、ヤジというより、辻本清美氏の弁説に対する感想的な「つぶやき」だろう。彼女が、例によって長々と政府を糾弾する質問をした最後に、〈タイは頭から腐る〉という比喩的表現で首相批判を加え、その席から降壇していた時に、首相がそれをつぶやいた。彼は思わず、本音を漏らしたのかもしれない。公的な場では、口に出してはいけないことの部類に入る言葉だろう。

すると、辻本氏が怒ること怒ること……。「**言った、言ったよね**」と首相を指さしながら、野党側の人々に確認を求めるように振り向いていた。

それは言葉の省略が多いから、言い換えてみると、「あいつが**言った**、確かに『意味のない質問だよ』と**言ったよね**」

自分の主張を〈意味のない質問だ〉と言われたのだから、くやしさいっぱい……。けなされたことになる。怒り心頭に発したことだろう。

「タイは頭から腐る」とは、ことわざを引用したものだろうかと思い、私は分厚い「ことわざ大辞典」をひいてみたが、載っていなかった。ネット情報によると、「魚は頭から腐る」というロシアのことわざがあるという。それに「腐ってもタイ」という有名なことわざを掛け合わせて、造語したものだろう。

それにしても、辛辣な首相批判だ。「**テメーは腐ったタイの頭だよ！**」と言い放ったことになる。たとえ話にしたのは陰湿であり、意地が悪い。

けっこう繊細な神経の持ち主（ときどきムキになる、あるいはキレる）安倍首相が、それに敏感に反応した。ほとんど反射的に「意味のない質問だよ」と言い返した構図になっている。

どっちもどっち、というような言い合いであり、私にとっては、おもしろい場面だった。第三者的にみて、辻本氏の質問が「意味があったのか、どうか」は、突っ込まないでおこう。

怒り心頭の辻本氏、数日後には、野党側を巻き込んで安倍首相に陳謝させたが、辻本氏の腹の虫が収まったかどうかはわからない。彼女は「意味のない質問」だったとは決して思っていないし、今後もそれを続けるだろう。与党側にとっては、馬の耳に念仏かもしれないが……。

③ カルロス・ゴーン逃亡

【毎日新聞朝刊 2020/1/1 一面、クローズアップ、社会
ゴーン被告がレバノンへ逃亡。保釈中だった。
仏副経済相「法を超越した存在ではない。もし外国人がフランスの司法を逃れるとしたら、私たちはとても怒るだろう」】
【毎日新聞朝刊 2020/1/12 社会
ゴーン被告は、逃亡先のレバノンで手広く投資する。ワイナリーや不動産開発も手掛ける。】
【毎日新聞朝刊 2020/1/14 社会
ゴーン氏が、退職金3000万円をルノーに要求する。生涯受け取れることになっている年間77万ユーロの年金や、認められなかった業績報酬についてもルノーに支払いを求める考えという。】
【毎日新聞朝刊 2020/1/23 総合・社会
ゴーン被告会見、一方的な発言に終始する。日本の報道機関は3社のみ (に制限された)。
ゴーン氏「(日産は) あと2，3年以内に倒産する」と話していた。具体性に欠ける発言を繰り返す。】
【毎日新聞朝刊 2019/7/26 一面、総合 (2019年の記事であることに要注意)
日産が1万2000人削減へ。欧米で不振、カルロス・ゴーン前会長が進めた拡大路線で過剰になった生産設備や人員を減らす。】

彼が頭脳明晰の人物であることは間違いないだろう。その頭脳をフル活用して、自分の利益を増大させようとする。

ー会社の金？ 社長のオレが決めるものだ。オレの会社の金はオレのものだ

ー退任後？ ニッサンがどうなろうと、オレの知ったことではない。あとはヤマとなれだ

ー違反？ 取り締まるやつらに見つからなければいいんだ

ーあいつが裏切った？ あいつは結局、儲け損なったんだよ、どじなヤローめ！

ー刑務所？ 保釈中に国外に逃げてしまえばいいんだ

ー犯罪者の国際間引き渡し？ オレはレバノンでは名士だ。だれが引き渡すものか！ オレにはコネもカネもあるんだよ

そんなコーンのつぶやきが、私には聞こえてくる。
悪知恵を駆使して自分の利益を確保するやり方は、超

一流だ。世界的にほぼ成功している。司法に追及されようと、容易に尻尾をつかませない。たくましく生きる能力を備えている。しかし、長く務めた日産の社長を退任した後、日本の司法をごまかせなかった。逮捕されたものの、保釈中に逃げるという手段を見出した。関西空港が出国管理に一番手薄いことを見極め、荷物の中に隠れてプライベートジェットに乗り込み、一気にレバノンに飛んだ。そして数日後、堂々の会見を開き、日本の司法をあざ笑う……。発表した声明では、日本の司法の悪口を言うことで自分を正当化することに徹していた。報道は、それを2時間半の「ゴーン劇場」だったとする。

逃亡先のレバノンの住まいは、日産系列会社に買わせた豪邸だから、ゴーンとしては高笑いをするにふさわしい。２０２０年の正月を家族とともに祝う。「ワッハハハ、楽しい世界だ。今年もオレは、主役を演じていきたいよ」

ゴーンの悪知恵が全開だ。天下一品のずるがしこさをもつ人だ。こんな悪知恵は、この世界で生き延びる一つの才能かもしれない。カリスマ性があるから、いっしょに組んで金儲けしようとする人たちが集まる。おこぼれに預かろうという人たちかもしれない。高額の報酬で雇われたと思われる弁護士たち、逃亡を手助けしたとされる人たちも、報酬目当てだったと言えるだろう。ゴーンは金で人を動かすことに長けている。今後も、悪知恵を全開して金儲けの道を突き進むことだろう。

私が「悪口」を全開しても、彼にはとても及ばない。

## ④　ソレイマニ司令官を暗殺したトランプ大統領

【毎日新聞朝刊 2019/5/20 総合
トランプ氏、イランのロウハニ大統領を名指しし「二度と米国を脅すな。さもなくば歴史上類を見ないような重大な結果を招く」と警告したことがある。ツイッターで「もしイランが戦いたいのなら、イランは正式に終わることになる。二度と米国を脅迫するな」と投稿した。】

【毎日新聞夕刊 2019/11/20 総合
イラン、デモの参加者で死者１００人を超す。アムネスティは治安部隊が銃や催涙ガスなどでデモ参加者を制圧する映像を確認した。中には狙撃手が屋上の上やヘリコプターから群集に発砲した画面もあった。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/4 一面、焦点

米が１月３日イラクで、無人機による空爆でイランの司令官ソレイマニ氏(62)を殺害した。ソレイマニ氏はバグダッド国際空港から車で移動してまもなく、米軍の無人機による爆撃を受けた。２台の車が破壊された。イランは報復を宣言した。】

【毎日新聞夕刊 2020/1/4 一面
トランプ大統領、イランのソレイマニ司令官の殺害について、軍事作戦の正当化を強調した。中東増派２０００人決定。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/6 一面
革命防衛隊の一部門、特殊作戦を行う「コッズ部隊」のソレイマニ司令官の殺害で、米大統領はイランの報復をけん制した。「イランの５２カ所を標的にする」】

【毎日新聞夕刊 2020/1/6 国際
中露が米国を非難した。ソレイマニ司令官の殺害で「武力乱用」として自制を促す。イラクは「主権の侵害だ」とする。米国への反発を強める。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/8 国際
ソレイマニ司令官の喪儀（何百万人の人が追悼したとされる）で地元に数百人が転倒し、３２人死亡、１９０人負傷した。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/9 一面、総合
イランの（予告通りの）報復攻撃を行った。イラク駐留の米軍基地にミサイル十数発。イランの反米感情が沸点に。】

【毎日新聞夕刊 2020/1/9 一面
トランプ大統領、イランへの報復を、追加の経済制裁にとどめる。「武力を使いたくない」】

【毎日新聞朝刊 2020/1/10 金言
ソレイマニ司令官は、イランの対外戦略の要だった。シリアのアサド政権を支えた。ロシアに軍事介入するようロシアを説き伏せた。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/14 国際
トランプ氏がソレイマニ司令官殺害の根拠としていたイラク大使館を含め「四つの大使館が狙われた」と発言していたが、国防長官がそれを否定した。エスパ長官は「米大使館四カ所が狙われていたとの情報には接していなかった」】

【毎日新聞朝刊 2020/1/15 国際
イラン司令官殺害で、トランプ氏、差し迫った危険があったかについて「彼は恐ろしい過去があるので、どうでもいいことだ」】

【毎日新聞朝刊 2020/1/17 国際
ソレイマニ司令官殺害で、イラクで反米が強まる。政

府「主権侵害」、民兵は報復を狙う。】
【毎日新聞朝刊 2020/1/27 総合
イラクの米大使館付近にロケット弾5発。】
【毎日新聞朝刊 2020/2/3 クローズアップ
ソレイマニ司令官殺害1カ月、イラン革命防衛隊の「コーズ部隊」を率いるソレイマニ司令官。イランがイラクの米軍駐留基地2カ所にミサイルを撃ち込んで報復したものの、トランプ米大統領は反撃しなかった。国防総省は大統領に作戦案を示す際、常に「三つの選択肢」を用意して最も現実的な案を選ぶよう誘導するという。】
【The Japn Times 2020/2/3 world
イランの攻撃で、（少なくとも）３４人の米軍兵士が負傷した。脳損傷（思考や記憶、感覚の減退を含む）を受けた。兵士の多くはバンカー（掩蔽壕）にいた。】
【毎日新聞朝刊 2020/2/12 国際
イラク駐留米軍へのミサイル攻撃で軽度の外傷性能損傷を診断された米国関係者が１０９人になった。】

　トランプは、何年も前から挑発的なイランにいらだっていた。イランにかなり厳しい経済制裁を課したりして、イランを締め上げようとするが、うまくいっていない。最初に挙げた記事が、そのいらだちぶりがよく示されている。でも、それによってイランの一般の人たちの生活が、物価高や雇用の縮小で困窮してきたことは確かだ。若者の失業率が三割を超えているとも伝えられている。その不満が政府に向き、反政府デモがたびたび起きていたが、弾圧しようとする政府側のやり方がすさまじい。その任に当たっているのが革命防衛隊であり、人々には恐れられている存在だろう。

　革命防衛隊は対外戦略にも、活動している。コッズ部隊（コーズとも記される）であり、イラク、レバノン、シリアの各地で特殊作戦を実行しており、各地で武装組織を立ち上げ、資金や武器を供給しているとされる。イラン政府の後ろ盾を持つ「武装組織」になっている。そのコッズ部隊の司令官がソレイマニだったから、アメリカにとって極めて「危険な男」だった。目を付けられていた人物だった。

　数年前に、ソレイマニ司令官はアメリカに対し、挑発的な発言をしていた。一例として、2018/7/27 ＢＢＣの記事から引用すると、「オマエ（トランプ大統領を指す）の脅威に対応するのが、兵士の私の義務だ。ロウハニ大統領でなく、私と話せ。我々の大統領の品位は高いから、わが大統領はオマエに答えたりしない」

「我々はオマエが想像できないほど近くにいる。来い。準備はできている」「お前が戦争を始めたら、我々が終わらせる。この戦争はオマエの持っている全てを破壊するだろう」

これらは意訳したもので、彼の真意とは異なるかもしれないが、ソレイマニ司令官はロウハニ大統領に近い人物だったから、「ロウハニ大統領でなく、私と話せ」と言ったのも単なるハッタリではなく、彼が政治的に実力を持っていたからだろう。ロウハニ大統領の右腕のような存在だったことになる。イランの最高指導者ハメネイ師ともつながりを持つ人物とされる。1979年に入隊してから数々の手柄をたて、上位に抜擢されてきた。実行力を伴う作戦家だったことは間違いない。

ソレイマニ司令官は、そのコッズ部隊を率い、イラン国外で、幅広く「特殊作戦」を展開していた。シリアでの活動では、アサド政権の立て直しに、彼の尽力があったとされる。イラク内では、シーア派の民兵組織(武装勢力)を立ち上げたりしていた。

その一つ「カタイブ・ヒズボラ」が2019年12月27日にキルクーク米軍基地を攻撃した。それが今回の暗殺事件の引き金になったとみえる。米軍が対抗し、その拠点を空爆した。それに抗議するデモ隊が12月31日に在バグダッドのアメリカ大使館に押し寄せた。襲撃したとも表現されるほど、激しいものだった。それらすべて、ソレイマニが裏で糸を引いていたものとみられた。その報告を受けたトランプ大統領が激怒した。彼は1月2日に暗殺命令を出し、3日にそれが実行された。

ソレイマニ司令官と「カタイブ・ヒズボラ」の最高指導者・ムハンディスを含む計8人が殺害された。イラクで、ソレイマニとムハンディスがいっしょに行動していたことが象徴的だ。

彼らがバグダッド国際空港から車で移動しているところを、空からピンポイントでミサイルを撃ち込んで討ち取ったのだから、作戦的には大成功だった。しかし、これは誰が見ても「だまし討ち」の攻撃だ。正当性を証明するのは、自国民に対しても難しいことだろう。

トランプ大統領は、これまでに退治したアルカイダやイスラムステートの首領のときと同様に、自慢気にそれを発表したが、どうだったか。これがイランだけでなく、世界中からの非難を浴びる結果になったのだから、トランプ自身も後悔したことだろう。「オレが

命令した」ことは伏せておくべきだったと。「イラク駐留のアメリカ軍が勝手にやったことにすればよかった」と思ったことだろう。その後の対応は、彼にしては、おとなしかった。さすがに、自制するしかなかったのだろう。

手際が良すぎたことも、イラン国民を激怒させる要因になった。「無人機で攻撃するとは、卑怯だ！」

彼は真珠湾攻撃のことを思い出したことだろう。自分が卑怯者になってしまっては、いくら戦果があったにしても、まずい。

イランは、国を挙げてソレイマニを「国家の英雄」と持ち上げ、国葬にし（多くの人々を動員されたようだ）、その殉教を嘆き悲しむところを見せた。イランの人々の怒りの矛先をアメリカを向けさせることに成功している。「アメリカに報復を！」と人々を煽り立てた。そして一週間後には、世論との約束通り（事前にアメリカと打ち合わせたかのごとく）イラク駐留のアメリカ軍基地にミサイルを撃ち込み、かたき討ちを果たした。その後にも、ロケット弾の打ち込みがあったけれど、個別の武装勢力が動いたものだろう。

そんなイラン政府の思惑通り、ソレイマニを英雄視する表現で、日本の某公共放送はテレビで事件を報じていた。イラン政府に片寄りすぎる報道だったことを、一部の有識者が指摘している。私もそう思えた。

トランプは「そのミサイル攻撃の被害は軽微だった」と言っていたが、アメリカ軍兵士の間で、１０９人という多数の「脳損傷」の症状がみられたことに、私は注目したい。爆風や爆音で傷ついたとみられる。

## ⑤　プーチンのロシア

【毎日新聞朝刊 2019/7/29 国際
モスクワ市議選、野党候補の出馬が不許可になった抗議集会で１４００人拘束。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/31 国際
ロシア、反政府指導者が一時入院。収監中、毒物に触れる？】

【毎日新聞朝刊 2019/8/5 国際
モスクワ市議選、市選管が独立系・野党政党の候補の立候補を５７人を認めなかった。却下された候補らが中心となって７月中旬から抗議運動を始め、２０日の集会には２万人以上を集めた。２２００人以上が拘束された。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/21 国際

プーチン氏が改憲に注力。（ロシアの）憲法を国際法より上位に定義する。】
【毎日新聞朝刊 2020/2/28 国際
プーチンのロシア、反体制運動は下火になっている。運動家の一人「ロシアは有力者たちに支配されている国であり、今は立場を異にするものの、有力者という点で、プーチンとホドルコフスキーは同じだ」】
【朝日新聞朝刊 2020/3/12 国際
改憲で、プーチン大統領の続投を可能に、任期制限に現職は対象外とする。】
【朝日新聞朝刊 2020/3/27 国際
プーチン氏が改憲を提唱したのは、１月。当初は「議会の権限を強める」などとされたが、改憲案は３月、議会採択の土壇場でプーチン氏が大統領の任期制限の例外となるよう修正された。
全ロシア投票は、改憲手続き上の規定になったが、プーチン氏があえて提唱した。成立に５０％以上の投票率を求める国民投票法は適用されず、投票者の過半数の賛成で成立する。改憲案には国民受けのよい年金改善なども盛り込まれ、改憲そのものは確実視されている。】
【朝日新聞朝刊 2020/3/28 いちからわかる
ロシアのプーチン氏、大統領選挙に出るの？
出られるように憲法を変えようとしている。プーチン氏の力は絶大だ。任期の終わる２０２４年が近づくと、腹心らが後継者争いをするかもしれない。】

　ロシアでは、政権与党の力が強すぎる。独裁的な権力の弊害について、無頓着になっているようだ。今回の改憲は、プーチンの権力をさらに長く、より強いものにするためのものだ。ロシア国民は、強い権力を持つものが長期政権を維持するとロクなことはない、という教訓を忘れているようだ。ロシアには、権力者には逆らわないという国民性が強いのかもしれない。絶大な権力で、ロシア憲法を変え、さらに強い力を維持しようとしている。独裁者への道を突き進む。プーチンは〈後継者争いでロシアに混乱が起きるのを防ぐためにオレが立ちつづける〉と言い訳しているのだろうが、本音は〈権力を握り続けたい〉だろう。そして大統領府であるクレムリン宮殿の主として、皇帝のごとくふるまう。
　プーチンは権力闘争に勝ち抜いて、のし上がってきた人だ。その立場を利用し、権力と「腕力」をふるってライバルや野党側の議員や、反政府の人々を押しつ

ぶしてきた。陰謀のプロフェッショナルでもある。
選挙という民主主義的手法で信任された形をとっているが、なりふり構わぬ強引なやり方で、選挙結果の数値をねじまげてきた。選挙管理委員会や、司法にも圧力をかけたことは明らかだ。これまで、反プーチンの動きが盛り上がっても、一時的であり、結局しぼんでしまっている。モスクワで反政府のデモがあっても、いつの間にか鎮圧されている。プーチンの強権的手法は、冷徹さに徹していることに特徴がある。そして彼自身が利己的でもある。
言論統制・報道規制はもちろんのこと、反対する野党の党首や新聞記者がいれば、警察とグルになって暗殺してきた（何とかにくちなし）、反旗を翻す武装勢力が人質を取って立てこもれば、人質ごと武力で一気に制圧してきた。
尊敬に値する人物であるかは、これまでの言動で、限りなく否定されるものだろう。こんなに人格的に問題のある人物を大統領にする国民がどうかしている。
ここ数カ月間（２０２０年３～４月）の、世界的な石油価格下落の原因は、プーチンとサウジアラビアの実力者ムハンマド皇太子の意地の張り合いをして（プーチンが石油減産に協力しなかった）、両国で石油を増産したためだと言われている。ここでも、プーチンらしい影響力を発揮している。
ロシアは歴史的に領土拡張に執心する国だ。プーチンは近年、クリミアや東部ウクライナを武力で強引に実効支配する行動を起こした。日本との関係において、日本が北方領土を返せと叫んでも、すんなり返そうとしない。北方四島が、日本の経済協力を引き出すための格好の「人質」になっている。ロシアにとって損になるような外交交渉はしないのが基本姿勢だ。友好関係を築こうという甘い姿勢はない。漁業権や石油資源開発に関しても、ロシア側の言いなりに日本は譲歩を強いられている。日本はよき隣国に恵まれていない、と私は嘆きたい。
大統領の任期はロシア憲法によって制限されているから、そろそろプーチンの退任の時期が近づいてくると、私は少々期待していた。しかし、改憲するという奥の手があったのだ。任期を実質的に延長する改憲だ。プーチンにとって実質的に任期制限を撤廃すればいいのだ。これまでにも、その期間を引き延ばしたりしてきたが、今回はかなり本格的だ。
改憲のためには、国民投票で決めるものだが、今回、国民投票ではなく、改憲のための「ロシア投票」を採

用するというから、やり方が巧妙だ。彼のずるさがよく表れている。ロシア投票は世界的な感染症の影響で延期されているが、それが実施されれば、確実にプーチンの思い通りに改憲が実現されるという。
　やり方はともかく、人格的にもともかく、大国のトップとしてここまで強権をふるい続けるのだから、プーチンは英雄的存在なのかもしれない。
　そしてプーチンが将来いつか政権の座から降りたとしても、ロシアではその次にも、似たような人物が現れるだろうという予想がその国民の間にあるから、うんざりさせられる。１９８０年代後半に発揮したゴルバチョフのような開明的な人物は、ロシアにはもう現れないということか。現れたとしても、プーチンのような人にすぐに引きずりおろされたりして……

### ⑥　原発マネーを取り仕切った助役

【毎日新聞朝刊 2020/1/7 社会
福井県高浜町の元助役森山栄治氏が関電幹部を恫喝した。「お前らに、こら、どこまで頭下げていかなんじゃ」と怒鳴りつけている（音声が記録されていた）。
「納得のいく回答を客観的にしてみい。けれども君の主観であれしてったら、事が収まらんいうことだけは知っとれよ」】

【毎日新聞夕刊 2020/1/8 社会
関電が、熊谷組受注に協力。９６年7月３０日に関電幹部は新研究所工事に関心を示していた森山氏に電話し、入札になったと伝えたところ、森山氏は「熊谷に取らせろ」と要求。同年8月8日と見られる電話の音声によると、森山氏「大林がなあ、なかなか、おまえ、降りんらしいやないかい」「特にゼネコンというのは、おまえ、義理と人情を大事にせなあかんのや」。
大林組の担当者「例の人がまた動いたということですか」、幹部「事情ご賢察いただきたい」】

【毎日新聞夕刊 2020/1/8 社会
関電大型案件、９７年着工の「若狭たかはまエルドランド」などを熊谷組が立て続けに受注していた。元助役が関心を示す。】

【毎日新聞夕刊 2020/2/14 オピニオン
森山氏には容赦なく人を恫喝するなど強権的、高圧的な面があり、特異な人物だったようだ。しかし、地元の関電への不信感は、「影におびえていた」と他界した人物に責任を押しつけるかのような姿勢を関電が見せたことだ。】

【朝日新聞朝刊 2020/3/15 一面、総合2
関電側の原発工事費が還流。金品受領は、役員ら75人、3．6億円。関電、泥沼の共犯。森山氏を接待421回？ 関電には土地売買を握られた弱み（森山氏が調停した）があった。】

つけ込まれる関電、原発を「利権」として金をせびる森山助役。

助役は義理と人情を標榜する。関電関係者には、こわい顔を見せるだけでなく、甘い汁を吸わせる。「**義理をはたせ**」とすごむ。一方で、人情として礼を欠かさない。多くの人に「付け届け」をしていたことがわかっている。

そして彼は私腹を肥やしながらも、町を発展させた。町は原発マネーで潤うことになる。町にとって彼は、一番の功労者だったろう。彼は元助役で、今では故人になっているけれど、町で彼のことを悪く言う人は少ないらしい。数々の疑惑についても「関電が彼に責任を押し付けている」との見方が大勢だろう。

地元の建設会社「吉田開発」の顧問になると、工事の入札に暗躍し、その会社が受注できるようにした。ゼネコンが絡む大規模工事では、特定企業を優先させ、利益誘導を図った。ライバル企業が入札しようとすれば、強引に押しとどめた。陰の実力者として関連事業を取り仕切った。工事を請け負いたければ、彼に取り入ることが一番の近道だということが、ほとんど公然と知られるようになっていた。もちろん、企業は手ぶらでは接触しなかったはずだ。接待に伴い、それなりの「手付」を用意したことだろう。その後は、義理堅く采配してもらえるのだ。億単位の工事総額に比べて、そんな出費ははした金だろう。

助役を退職した後も、関電が直面する厄介な原発運転問題に関わり、付近の浜辺の海水温上昇でクレームをつけた（実際に被害があった）土地所有者との間に入り、高額な売買を成立させたりした。調停者として双方に恩を着せたりして。恩はマネーで返すのが彼の掟（おきて）だろう。

彼は商才がありすぎる人だ。うーん、たくましい。（小さな町の助役にしておくのはもったいなかった）関電の幹部たちが受け取った金品は、ばれてしまったから、助役の遺族に返されることになっているという。さぞや立派な墓が作られたことだろう。

## ⑦ 弁護士懲戒請求と賠償訴訟

【毎日新聞朝刊 2018/5/11 総合・社会
懲戒請求された弁護士、広がる法的措置の動き、損害賠償求め提訴へ。懲戒請求者は、弁護士に和解金10万円を支払って謝罪する人も出ている。】
【毎日新聞朝刊 2019/4/12 神奈川
懲戒請求、弁護士2人が712人相手取り反訴。これに対し請求者ら720人が昨年10月、脅迫に当たるとして損害賠償を求める訴訟を横浜地裁に提訴していた。】
【毎日新聞朝刊 2019/4/13 社会
弁護士会への懲戒請求が相次いだとして東京地裁が請求者に賠償命令。】
【毎日新聞朝刊 2019/4/20 総合・社会
大阪地裁が懲戒請求の扇動者情報を開示することを認めず。】
【毎日新聞朝刊 2019/5/15 総合・社会
在日コリアン弁護士に対する懲戒請求、東京高裁は「差別」とした。一方、賠償請求を11万円に減額。】

弁護士が懲戒請求されたら、請求した側に訴訟で対抗するという図式だ。その弁護士たちは、「訴えるぞ」という単なる脅しではなく、本当に訴えている。そしてほとんどのケースで勝訴している。少数の弁護士が大多数の懲戒請求者に対して、怒りの鉄槌を振り下ろしている構図でもあるから、興味深い。

懲戒請求する側はほとんど一般人だ。裁判に訴えられたら、相手は法律の専門家であり、勝ち目はない。そもそも懲戒請求の根拠がいい加減だから、勝ち目はない。泣く泣く(?)和解に応じ、和解金を支払うことになっている。

弁護士会への懲戒請求も、弁護士が行う訴訟も、原則的に自由なことだが、どちらも、「感情的」な正義感や報復心に基づいているところがあり、冷静な対応が必要だろう。

特定の弁護士に対し、大量の懲戒請求がある。一部の人に扇動され、一般の人々が一斉に行うものだ。これは、懲罰を求めるというより、時には一種の「抗議」の意味を持ったりする。しかし、時によって「いやがらせ的」な意味合いを持つ。それでは安易な乱用だろう。そんな理由で懲戒請求されたら、怒るしかない。うっぷんを晴らさなければならない。

在日コリアン弁護士に対する懲戒請求した例が、わかりやすい。彼らは、朝鮮学校への補助金支給を推進する取り組みを行ったことで、「朝鮮嫌(ぎら)いの

人々」が反発し、彼らに対する懲戒請求を出したわけだ。彼らには、在日コリアンに対する差別意識が背景にあると考えられる。

その弁護士は、その意味合い（悪意）を敏感に感じ取り、対抗手段に出た。そんな請求したものに対する賠償請求だ。「弁護士としての社会的評価の低下や業務妨害」に当たるとし、「業務妨害された」ことへの賠償を求める。ただし、具体的にどれだけ損害を受けたか、数値化は難しい。そこは「弁護士費用のあいまいさ」で見積もればいいのかもしれない。

業務として煩わしいのは、むしろ、その請求を受け付ける弁護士会の方だろう。その受理する職員たちは、大量の懲戒請求の書類を受けて、戸惑うことになる。ただし、請求内容が同じだろうから、実質的にかかる手数は少ないかもしれない。対象の弁護士に説明を求めることもあろうが、内容が同じであれば、いくら請求の数が多くても、以下同文にすれば済む話だ。実際に請求を受けたとしても、審査を経てのことだから、懲戒に至るケースはわずかしかないらしい。つまり、業務妨害といっても、その請求数に比例しない程度だろう。請求が弁護士の不名誉に直結することも少ない、と思える。何をしたことによって懲戒請求されたのか、を見極めて判断するだろう。そのため、請求者一人一人に賠償を求めるのは「いい商売」になってしまいそうだ。

「いやがらせ」された弁護士は、一人の請求者に対して約１０万円を求めている。請求者にとってそれは確かに脅迫的だろう。訴訟の相手が、弁護士なのだから、請求者たちにとって相手が悪すぎる。訴訟では判決に至らず、多くは慰謝料などとして約１０万円で和解している。和解せざるを得ない。差別の代償として、１０万円を支払うのは妥当なところだろう。

## ⑧ ノートに書き留めた「同級生の悪口」

【神奈川新聞朝刊 2020/3/25 社会

小学校６年の女児とその両親が、いじめを加えた同級生の保護者と、それに加担した学校側に損害賠償を求めた訴訟で、横浜地裁川崎支部は3月２４日、学校側の不手際を認め、市に４４万円の支払いを命じる判決を下した。「担任の対応は人格権侵害だった」とした。川崎市立小学校5年生だった女児が２０１６年４月以降、同級生から暴言や暴力を受けていたことを書き留めていたノートを同級生らが見つけ「ノートに悪口を

書いた」と糾弾。女児は、担当教諭に促される形でクラス全員の前で謝罪した。翌日から登校しなくなり、後日適応障害の診断を受けた。】

悪いことをしたら、謝らせる。教諭の役目だろうが。子どものけんかや、いさかいでは、どちらが悪いとは、はっきりしないことが多いだろう。単純に「けんか両成敗」などとも言えるものでもない。しかしながら、どちらが弱い立場にいるかという見極めは必要だろう。

単に体が触れたから、あるいは、呼びかけのために肩をたたいたことで、〈報復のために、たたき返す〉というようなことも、子どもの世界ではよくあることだ。子どもたちは一発触発の世界にいるのだ。特に体力的に弱い者は、生きにくい。

暴言や暴力を受けていた側にしても、何らかの非があったと考えられるが、非をとがめるのに暴言・暴行を用いたとならば、それは手段として不適切であり、「いじめ」とみなさなければならない。単に「あいつが嫌い」だから、あるいは、弱みに付け込んで金銭を引き出す（金を借りる、おごらせる）ための暴言・暴行ならば、ここで私が言うまでもない。

このケースでは、そんないじめの「被害者」が謝罪させられた、と考えられるのだ。裁判の判決が、それを支持したことになる。

自分が悪いことをしたという自覚のないまま、クラス全員の前で、恥さらしをすることになれば、口惜（くや）しいことだろう。感受性の強い、ナイーブな子供にとって、耐えられないことだ。クラス全員、先生までも、自分を責め立てる、**「私（うち）が何をしたというのだ！」**

女児児童Aは、ノートに同級生Bの悪口を書いたとされる。と言っても、自分のメモとして書いたのだろうから、他人に読んでもらうためでもなく、読ませるためでもなかったはずだ。

ノートに書き留める行為を否定することは、裁判官の言う「人格の否定」にもつながりそうだ。そもそも、〈同級生から暴言や暴力を受けていたこと〉をノートに書き留めていたことは、悪口にあたらない。出来事を書いていただけだ。それは「記録」というべきだ。頭の中で思い出しながら出来事をまとめる行為と同じだろう。なんら「やましいこと」でもない。謝罪するいわれもない。

Bは、Aに係わった後など〈Aがこそこそ何やら書いている〉ことを怪しんだ。そこで、Aのいないとこ

ろでノートを盗み見た、と推察される。
書かれた側としては、その恨みがましい、執念深さに、怒りを覚えるのかもしれない。これが公表されたら、やばいことなのだ。Ａ側の一方的な内容だから、これだけでは自分が加害者にされてしまう。それが事実ならば、りっぱな加害者だろうが、Ｂにも言い分はあるだろう。Ｂが同級生たちに言いふらす。
「おーい、みんな、Ａのやつがこんなことまで書いているぞ！　ウチが一方的にいじめていることになっている」
「ひどい悪者として書かれているね。そうかもしれないけど……」
「あること、ないこと書いているんだろ」
「後で、センコーに言いふらすために書いているんだ！」
そんな話声が、先生の耳にも届くことになる。考えるべき要件は、まず、その書き留めた内容が〈事実か、うそか〉だろう。被害妄想のような可能性もある。それが事実なら、なぜＢが暴言暴行に及んだか、Ｂに説明を求めるなりして理由を知るべきだろう。
それに、他人のノートを、本人に断りもせず盗み見た行為は、「不法捜査」に当たるだろう。つまり、それによって得られた証拠は、裁判では無効にされているものだ。
その担任教諭は、それをろくに確かめもしないで、Ａが「ノートに悪口を書いた」だけを取り上げ、「卑劣な行為」とみなした。つまり、中傷するためのうそと思い込んだのだろう。そこで、Ａにクラス全員の前で謝罪させるという「懲罰」を課したわけだ。それでは誤審したというべきことだろう。
ノートを見たのは複数の同級生がいて、怒りまくっていた。担任は多数派を信用し、彼らをなだめるためにも、Ａを悪者にしたのだろう。しかし、怒っている方が正しいとは限らないし、少数派が弱者であることを忘れていたのだろう。
Ａはその翌日から小学校に行かなくなり、適応障害になった。

## ⑨　パワーハラスメントと指導力

【毎日新聞朝刊 2019/6/6　総合・社会
職場で女性のみパンプス着用を強制する企業に関して、状況によってはパワーハラスメントに当たる。】
【毎日新聞夕刊 2019/11/2　総合

4人に1人が「うちはブラック企業」と連合総研の調査に回答した。長時間労働、パワハラが横行。】

【毎日新聞朝刊 2019/11/10 人生相談

(私は)2人の部下に軽んじられる。「年下のくせに偉そうに」「できません」と言われる。】

【毎日新聞朝刊 2019/11/19 社会

トヨタ社員のパワハラ自殺で、労災認定。男性は直属の上司から「ばか」「あほ」と叱責され、「死んだほうがいい」と言われたこともあったという。適応障害と診断された。男性は東京大大学院(航空宇宙工業専攻)を終了しトヨタに入社、3年目に自殺。】

【毎日新聞朝刊 2019/11/21 一面

厚労省、パワーハラスメント防止措置で、「パワハラでない例」を明記した。それはパワハラを助長するという批判があったが、使用者側が押し切った。暴行・傷害に関して〈誤ってぶつかることは該当しない〉など。】

　管理者、いわゆる上司の者は、業務において部下を統制、指導、命令、叱咤激励する権限を持つ(持たされている)。一般に管理業務というものであり、部下の能力や成果を引き出すために必要だ。それだけでなく、業務効率を低下させるような要因(心身面など)があれば取り除かなければならないなどにも気を配らなければならない。その地位に対応する種々の権力(パワー)が与えられている。部下の人間は、勝手に動きがち、あるいは、さぼりがちな面があるから(家畜と同じようなもの。社畜という言葉もある)、手綱を引き締めて走らせる必要がある。競技の選手たちを指導するコーチの立場と同様だ。目標や方向性を定める(ベクトルを合わせるという)のはもちろんである。日程や人材の配置を考えるのも、管理者の主要な業務になる。緊急な要件であれば、強圧的に部下を追い込むことも時には必要だ。

　権限を持つと、パワーハラスメントも可能になるのは確かだ。立場を利用して無理な要求をしたりする。自分の都合のいいように悪用するケースも出ている。前述の記事には示していないが、女性に関係を迫り「合意の上でのことだ」とうそぶくケースがその典型だろう。

　いやがらせや罵倒されるなどのパワーハラスメントで従業員が精神・神経の障害を負い、自殺するケースも出ている。下位者にとってパワーハラスメントに対抗するのは難しい。あとで遺族たちが労災の認定をし

てもらうことや、法的手段に訴えるようなことしかできない。
　厚労省がパワーハラスメント防止措置のためのガイドラインを策定する際、「パワハラでない例」を挙げている。
　パワハラでないなら、堂々とやっていいというお墨付きを付けることになる。たとえば、「（灰皿などを？）ぶつけた」ケースで、「誤ってぶつかった」と申し開きすれば、パワーハラスメントにはならないわけだ。使用者側（会社側）としては、パワーハラスメントを厳しく取られたんでは、管理業務に支障をきたす、と考えて、厚労省のガイドラインに「口出し」したと報道されている。
　一方で、権限を持っていながら、それを十分にふるえないケースがある。中間管理職にありがちなことで、部下が上司の自分を軽視する。「2019/11/10 人生相談」のケースのように、何か業務を与えようとしても、「できまんせん」と言われてしまう。これは悩ましいものだ。部下になめられているのだから、発奮してほしいところだ。それは強いストレスになりうる。
　その部下たちは彼を上司と認識していないのだろう。彼個人の指導力の問題というより、組織の問題だろし、彼とその部下の関係をあいまいにした一つ上級の上司の責任に負うところが大きい。
　紹介の時、上級上司は「おい、テメーら、今から彼がおまえたちの上司だ。若いが、オレの代わりだと思って指示を仰げ！　査定にも影響するから、なめんなよ！」と言うべきだ。部下たち「ヘイ！　若頭、夜露死苦（よろしく）」（半分茶化した）

### ⑩　織田信成＝泣き言をいったスケート部監督

【毎日新聞朝刊 2019/11/19 総合・社会
関大スケート部の監督だった織田氏がコーチを提訴した。「（ボクは）嫌がらせされた」】
【ネット Business Jurnal 2019.11.26
［織田信成、モラハラ訴訟にスケート界で疑問広まる。浜田コーチの加害行為に具体性乏しく］
訴状によれば、２０１７年春頃、織田氏が、関大の練習リンクで「８の字滑走」で一度に５人を滑らせていた浜田コーチに「危険だから３人にすべきだ」と忠告した。浜田コーチは「あんたの考えは間違っている」などと激怒して反論したが、他のコーチらとの協議で３人にした。だが、その後、浜田コーチが「監督にな

って偉そうになった」「（織田氏が）勝手に決めている」などと陰口を叩いたり、織田氏が挨拶しても無視するようになったとする。】

監督・織田信成氏（1987年生）とコーチ浜田氏（ヘッドコーチ格、60歳女性、以下Aと略す）の確執が訴訟に発展した。立場から言えば、織田が上司で、Aが部下だったわけで、上司が部下を訴えることは、かなり奇妙なことだ。織田氏に言わせれば、〈Aにモラルの問題があった、忠誠心がなかった〉ということだろう。

織田信成といえば、日本のフィギア・スケート選手として活躍し、一流レベルの人だった。競技からの引退を表明したのは、2013年12月だった。その後、元スケート選手の名声で、タレントでテレビ出演したりして、多くの人に顔なじみの人だ。戦国武将・織田信長の末裔という点でも知られている。世間では「おもしろタレント」の一人として、一時的にもてはやされた。

選手として極めた人であれば、その道の指導者として期待されるものであり、本人の人生進路としても、自分の経験が生かされるから、望ましい方向だろう。

2017年4月、母校の関西大学アイススケート部の監督兼コーチとして就任したのは、ちょうどよかったはずだ。

関大は彼の母校だった。でも、母校だったといっても、それは昔の選手時代のことであり、コーチやスタッフ陣の顔ぶれも異なり、彼は、いわば新参者であり、部外者がいきなり監督としてやってきた状況がうかがえる。あるいは逆に、ベテランのコーチたちは選手時代の彼をよく知っており、以前教えていた選手がいきなり監督として自分より上の立場になったことへの違和感を抱いたのかもしれない。〈スケートがうまくなったのは、誰のおかげやねん！〉などと思ったかもしれない。

彼は、最初は熱心に取り組み、練習方法、スケジュールなどの改革を推し進めた。それが彼に課せられた任務であるとの自覚があったのだろう。〈それまで通りのやり方では、よくならない。さらに高みを目指すためには、変えなければ……〉彼なりに考えたことだったのだろう。しかし、それまでやってきた方法を変えることには、どうしても周囲から反発を受けることになる。

問題のきっかけは、練習方法をめぐって意見の相違

があったことが挙げられている。監督就任早々の２０１７年春、Ａが関大の練習リンクで「８の字滑走」で一度に５人を滑らせていたことに、織田氏は「危険だから３人にすべきだ」と指示した。すると、Ａが激怒した。「**あんたの考えは間違っている**」と言い切ったとされる。この場では、他のコーチらと協議して、織田氏の主張を取り入れて３人にしたが、収まらないのはＡだろう。憤懣やるかたなかったようだ。その後、Ａが「監督になって偉そうになった」「（織田氏が）勝手に決めている」などと陰口を叩いたり、織田氏が挨拶しても無視するようになったのだ。

それ以来、ささいなことでいくつかの衝突があったとみえる。Ａだけでなく、他のコーチたちも、監督が自分思い付きのようなことを練習方法に取り入れようとすることに、とまどいをみせる。ときには、いらだつ。自分たちのやり方が否定される形だった。Ａは周囲のものを味方につけて、監督包囲網を築く。コーチたちはあからさまな反発の態度を見せはじめる。

織田氏が熱心に指導しようとすると、そのたびに反発が強まる。織田氏はコーチたちの信任が得られなくなり、孤立してきたのだろう。監督一人、声高に主張しても、周囲がついてこない。のけ者にされてくるという状況を思い知らされてくる。確かに、これはつらい立場に追い込まれたものだ。監督としての誇りもずたずただ。

感受性の強い織田氏は〈これでは監督としてやっていけない〉ことを自覚し、心身の調子を崩し、就任から約2年半後の２０１９年9月に退任したわけだろう。泣きの一手（？）で引き下がった。

織田氏は、基本的に「雇われ監督」だったわけで、人事権がなく、反逆するコーチの首をすげ替えることもできなかったのだろう。「コーチを変えてくれ」と、悲鳴を上げるように大学側幹部に泣きつく方法があったかもしれない。大学側は、実績のある有能なコーチを、正当な理由なく辞めさせるわけにはいかなかったようだし、話を聞いてみると、コーチの言い分のほうがもっともなことだ、と彼らは考えたことになる。「自分の言い分が通らなかったから」という理由では、単に「わがまま」としか受け取られない。

監督を自ら辞めたのでは、単なる「負け犬」だろう。コーチの上に立つ監督であるならば、もっと毅然とした態度をしてほしいところだ。改革を推し進めたいならば、単なる思い付きのアイデアで変えるのでなく、周囲が納得できる説明をして変えるべきだろう。価値

観の異なる議論になれば、毅然とする態度で、結論を出す必要があるだろう。その場合、議論にいらだったりしてはいけない。納得されないまま変えようとしたことが、軋轢を生んだ原因だろう。

格上の監督だったものが、部下のコーチを裁判に訴えるようなことだから、なさけない。それだけでも指導者としての資質が疑われてしまうことだ。

彼はコーチのモラハラ（モラル・ハラスメント）を主張しているが、問題は彼自身にもあるとの指摘がある。彼の指導ぶりについて、部員の保護者たちの間で、感情的な叱咤が多かったという指摘の声も上がっている。「禁句」のようなことまで言い放ったことがあるという。成績の上がらない部員に「価値のない人間だ」、海外から来た部員に「祖国に帰れ！」などと言い放ったという証言もある。つまり、言われる側の気持ちがわかっていないようなのだ。それでは選手もついてこなくなる。

## ⑪ 使用しなくても水道メーターが上がる

【毎日新聞夕刊 2019/5/25 社会
西宮の男性が「漏出で過大請求された」と市を提訴した。地中に埋設された不明水道管が水をとっていた？】

西宮の男性をAさんとしよう。Aさんは、余計な水道料金を払わされていたのだから、怒った。市を提訴したのだが、水道水を横から引き、ただで使っていた人に請求すべきだろう。執念の人、Aさんといえども、それを突き止めることはできなかったようだ。分岐した水道管は道路を横断していたから、掘り進めていくことは無理だった。

水道管はほとんど地下に埋もれており、地権者といえども、敷設状況がどうなっているかわからない。地下に埋めるのは水道管だけでなく、生活に必要な電気や電信のケーブル類やガス管もそうだから、同様な弱点があるだろう。つまり、故意か偶然かにかかわらず、その途中に分岐（タップ）を設けて引用されても、ほとんど気づかない。その分岐が埋められ、整地されてしまうと、調査のために地面を掘り返すようなことは、専門の業者でなくてはほとんど無理だ。逆に言えば、こんな仕組みを考え、実行した人物は、巧妙すぎる。地面の下のことだから、ばれっこないと思っているだろう。これは窃盗に相当する。

どこで水道管が分岐し、どこに伸びているのかが問題だった。水道メータからAさんの家までの間、あるいは、家の中で分岐しているのかもしれない。いずれにしろ、掘り返したりする工事は、大変な作業になる。家の壁の中だったりしたら、家を部分的に解体する覚悟が必要になる。それを発見し、水が流出しているのを止める工事を行う必要がある。Aさんは、困難さをいとわず追及していったが、配管が道路の下をくぐり、向い側に伸びていることを知り、断念せざるを得なかった。その憤懣は市にぶつけるしかなかった。

その分岐は、専門的な工事業者により宅地や道路を造成するときに行われた可能性があるだろう。

詳しく状況を想像してみよう――

Aさんは、水道利用金が高すぎることに気付いた。

「おかしい。こんなに水を使っているはずない」

以前住んでいたときの水道利用金の差額が大きすぎることで、気付いたのだろう。約二倍だった。水道料金は、下水料金に連動するものだから、やはり、それは無視できない。

「水道メーターがおかしいんではないか？」という疑問を持つ。「水道メーターが故障しているのではないか」と市の水道局に訴えても、ラチがあかなかった。

彼らはしぶしぶ調査し、「わずかにメーターの誤差はあるにしても、十分に正常範囲内だ」と言い張る。

水道メーターを疑いの目でじっと見ていたAは、重大な事に気付く、「家の中でぜんぜん水道を使っていないのに、メーターが動いている！」

ちょろちょろと漏水しているのであれば「無視できる範囲」としても、現実は「しっかり流れている！」。流れる量が変動していることも分かった。変動するということは「誰がが使っている！」。

おそらく被疑者の家では水道を湯水のごとく使っており、その料金は他者の支払いだから、気分よく湯船などに浸かっているのかもしれない。Aさんとしては、それが許せない。意地でも、追及してやろうと、執念の鬼になった。

Aさんはどこで水が流れ出ているのか、調べることにした。メーターのある所から、一心不乱に地面を掘って、水道管の敷設状態を調べた。そして、分岐個所を発見した。それがすべての元凶だった。これは隣家に流れ出ているのではないか、という邪推が頭の中によぎる。地面を掘っていくと、それは道路の下をくぐっていた。道路は舗装されているから、自分の手ではさすがにそれ以上掘り進めない。

もう憤懣やるかたない。「道路の向こう側にある家のだれかが、オレの家の水道を勝手に引いて使っていたんだ！」

しかし、それが不明では、訴える相手は西宮市しかなかった。「市が、ここで漏れ出ているのを、長年放置していたんだ！」八つ当たり的な提訴になった。

Ａさんは分岐を切り離し「漏水」を止めたことだろう。困ったのは、水道を止められた道向こうの家だろう。改めて水道を引いたりすると、その工事を見られ、ばれてしまう。Ａさんに怒鳴り込まれる。今まで支払っていなかった分をまとめて請求されてしまう。水道を止められたのでは名乗り出るしかないようだが、怒り心頭のＡさんと和解したかどうかは不明だ。

## ⑫ 逗子・斜面崩落

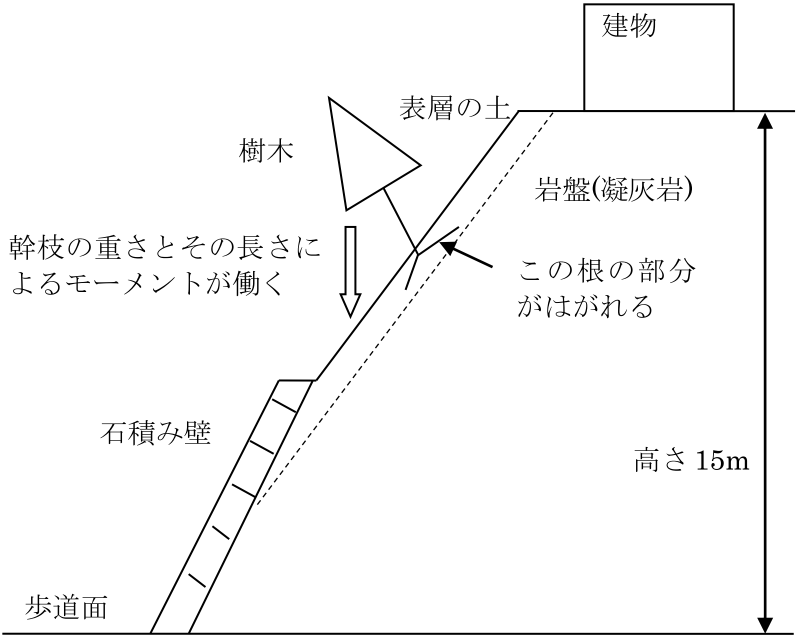
【毎日新聞朝刊 2020/2/5 社会
逗子で斜面が崩落した。下敷きになった女性が死亡。雑木の生えた斜面の上方にマンションが建っていた。】
【毎日新聞朝刊 2020/2/8 神奈川
逗子崩落で、国交省が現場調査した。斜面の凝灰岩が風化し、亀裂が入り、もろくなったとみられると述べた。高さ１５メートル、７メートルの高さまで石積みで補強されていた。土砂の量約６８トンが崩落。現場はもともと土砂災害警戒区域に指定されていた。】

大雨が降ったわけでもなく、地震が起きたわけでもないのに、日中いきなり斜面の土砂がすべり落ちてきたとは、おどろきだ。ここは京浜急行・神武寺駅にほど近い道路の斜面であり、歩道を歩いていた１８歳女子高生が土砂の下敷きになり死亡したのだから、とんでもない事件が起きた。

現場写真を見ると、えぐられたように崩落した個所以外の斜面には、鬱蒼とした草木が生えており、高さ４～５メートルの雑木も何本か見えている。土砂が剥がれるとともに多くの雑木といっしょに滑り落ちた、と見える。もちろん、崩落は、斜面の角度がかなり急なことに関係している。

専門家が調査した結果の〈凝灰岩が風化し、ひび割れたから〉という説明では、納得しにくい。土木の専門家ではない私がおこがましく見解を述べると、土砂が剥がれたのは、雑木の重さのため、と推測する。

次の図は、斜面の断面を模したものだ。




この辺りの雑木は、斜面からまっすぐ上に伸びるのではなく、日当たりを求めて斜面から張り出すように伸びていくことが多い。そのため、下方へ引っ張るモーメント力が、木が伸びる高さに比例して大きくなる。雑木の根は、表層の土に広がるように横に伸びていく。岩盤にさえぎられるから、深くには伸びていかない。根は岩盤の中には入らない、とみる。岩盤のひび割れに入ったとしても、樹木を引き倒そうとするモーメント力に耐えるだけの強さにはならない。もろい凝灰岩では、すぐ抜けてしまう。

　このモーメントは、幹の長さとその重さで、てこの原理によって力が増大する。バールのようなものだ。根の部分（上方の土）がはがれると共に、樹木を倒すことになる。表層の土に穴が開くから、それをきっかけに大量の土砂が滑り落ちたものだろう。

　雑木の成長とともに倒れやすくなる。つまり、斜面の雑木を長年放置していたことが、この事故の敗因になる。岩盤を覆うように表層に土を張り付けただけの構造が、そもそもまずい。

　この斜面の造成は、はっきりした記録に乏しく、マンションが建てられる以前の、ある企業の社員寮が建てられた１９６９年以前に行われたというから、約５

0年たっているわけだ。このような造成地では、樹木を伸び放題にしてはいけないことになる。雑木は、どこからか種が飛んできて土着し、自然に成長する。低木のうちなら、いいだろうが……。

⑬ゴジラがせきすりゃコロナがうつるかも

【毎日新聞夕刊 2020/2/4 社会
クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号で、横浜で待機が続く。新型肺炎の検疫で３７００人対象。】
【毎日新聞夕刊 2020/2/6 一面
クルーズ船で新たに 41 感染、計 61 人。】
【毎日新聞夕刊 2020/2/21 社会
厚労省幹部「大きなせきをする人はいないと思います、ゴジラでもなければ」】

２０２０年４月になっても、コロナウイルスによる新型肺炎（ＣＯＢＩＤ-１９）の感染拡大が止まらない。４月７日には主要都府県に緊急事態宣言が出された。

年初において感染者がほとんどいなかった日本で広まるのを防ぐため、感染者が確認されたクルーズ船ダイヤモンドプリンセス号は横浜港で足止めされた。乗客乗員はとんでもない目にあったことになる。優雅な船旅が台無しになったことだろう。他の人と接触しないように、乗客は、ほとんど船室に閉じ込められていたという。うろうろと廊下を歩くと、乗員に「**部屋に入っていてください！**」と言われてしまったという。それでも船内にいては、どんどん感染が拡大することが目に見えていた……。現に、日を追うごとに、船内での新たな感染者の数が増えていった。そして死者の数も増えていった。

クルーズ船が足止めを食らうのは、世界中で起きている。アメリカでもあったし、３月２８日の報道では〈オーストラリアで１０隻以上のクルーズ船の数万人が上陸できない〉とあった。

その乗客たちの一部を愛知県岡崎市・藤田医科大学岡崎医療センターが受け入れた。これは英断だろう。「乗員乗客を長期間船内に閉じ込めておくわけにはいかない」という人道的な配慮が働いたのだろう。開院前の施設（開院予定は４月７日）を利用して、乗客が滞在・待機するための場所として病院側が提供したのだ。乗客の中には感染が疑われる人も含まれていた。開院前だから、病室とベッドはあるにしても、医療機能が整っていない。食事を出さなければいけないが、

それは外部業者から仕出しをしてもらうことでメドを立てたという。〈限定的に病室とベッドを使うだけならいいだろう〉と判断したのだろう。感染が判明したら、他の病院へ移すという対応だった。今後とも、このような緊急的な対応が必要になることだろう。

急遽決定したようで、２月１６日の未明に第一便の３２人を乗せたバス（自衛隊の車両が使われた）が、医療センターに到着した。

それに困惑したのが周辺の住民たちだ。中には怒って文句を言う人も多くいたようだ。医療センターの場所が市立岡崎小学校と道を挟んで向かい側にあること、また近くには高齢者施設があることを理由にして反対を叫ぶ。（おそらく、自身に感染するのが怖いから反対している）　事前の連絡がなかったということも大きな不満になっていた。そのため当日の夜、受け入れを決めた関係者たちが住民説明会を開いた。これも公的機関としては迅速な対応だろう。説明会には多くの人が集まり、立ち見の人も多くいたという。

殺気だった雰囲気の場で、厚労省東海北陸厚生局の局長・金井要氏（57）が発言した。小学校が近くにあるという住民からの指摘に対して、「めちゃ離れております。飛沫感染ですから、大きなくしゃみでもしなければ届きません、ゴジラでもなければ……」と説明し、すぐに「最後は冗談です、すみません」と謝った。

冗談を言ったことで、〈不安な住民の心を逆なでした〉として批判を浴びた。その心は〈人が真摯に議論しているのに冗談言うな！　こんな場所で冗談を言うのは不謹慎だろう〉といったところだろう。

それはたわいもない冗談であり、それに目くじら立てるのはユーモアを解さない人だ、と私は思ったりする。局長には、不安がる住民を何とか和ましたい、安心させたいという配慮があったものと思われし、そう言い訳していた。でも、怒っている住民に対しては、確かに、ますますいらだたせることかもしれない。

ところで、彼は「ゴジラがせきをしない限り、飛まつでは移らない」と言ったのだが、この新型肺炎の感染力は相当強そうだし、せきやくしゃみで何十メートルも飛沫が飛びそうだから、ゴジラでなくても、隣の小学校に届く可能性があると私は考えたい。人々の中にはゴジラ級の大声でくしゃみをする人もいるのだ。

「**ワックショーン！**」　時速３２０キロ（初速、ネット情報による）で飛沫が飛んでいく。